5. 隠された日露友好のエピソード

5.1. プチャーチン使節の訪日

プチャーチン

1843 年 7 月 10 日（露暦は－12 日）　海軍少将エフフィーミー・ワシーリエヴィチ・プチャーチン Евфи́мий Васи́льевич Путя́тин（1803 年 11 月 20 日～1883 年 10 月 28 日）のシベリア委員会への意見書アヘン戦争後の 1842 年の南京条約締結を踏まえ、英国との競争に負けないよう全権代表を中国に軍艦で派遣し、あわせてサハリン島などの探検と日本との交渉の再開を提案。「レザーノフ使節の場合と異なり、船を直接に首都の江戸の港に入れれば成功がより期待できるように思える。長崎ではオランダ商館の商人が交渉を妨害するべく万策を尽くすだろう。」ニコライ 1 世は提案を受け入れ、8 月 28 日、日本皇帝宛親書に署名したが、対英政策で慎重な外相･蔵相に反対され、派遣延期となる。

1852 年 3 月　艦隊を派遣し日本に開国を求める計画が米国にあることがわかる。

5 月　ロシア、日本への使節派遣を決定し、プチャーチンを使節に選任。

10 月 19 日　プチャーチン、パルラダ Палла́да 号でクロンシュタット港を出港し、英国ポーツマス港に向かう。

11 月 24 日　米国、ペリー艦隊、日本へ向け出発。

1853 年 1 月 30 日　ロシア、プチャーチン艦隊、日本へ向け英国ポーツマス港を出発（英国で船を調達）。

3 月 11 日（露歴 2 月 27 日）　「日本との交渉についてのプチャーチン宛外務省追加訓令 730 号」
通商上の利益の達成こそ真に重要であるので国境問題については寛大でよい。つまりクリル諸島のうち、ロシアに属する最南端はウルップ島でよい。
そのほか、日本の国法に従い、江戸ではなく長崎に入港せよとの指示を含む（もと長崎商館医師でドイツ人シーボルトの提案）。

夏　プチャーチン艦隊、喜望峰を周り、シンガポール、香港を経由、小笠原諸島父島二見港に到着し、東洋艦隊の 3 隻と合流して、パルラダ号を旗艦とする 4 隻の艦隊を編成。このとき追加訓令を受領。

資料：「日本との交渉についてのプチャーチン宛外務省追加訓令 730 号」

Из утверждённой императором Николаем I 24 февраля 1853 г. дополнительной инструкции МИД России Е.В. Путятину о переговорах с японцами No. 730 от 27 февраля 1853 г. 皇帝ニコライ 1 世により 1853 年 2 月 24 日付で承認された、1853 年 2 月 27 日付日本との交渉についての E. B. プチャーチン宛ロシア外務省追加訓令第 730 号

Что касается до самих писем к Губернатору острова Нагасаки[1] и в Верховный Японский Совет[2], которые при сем к Вашему Превосходительству препровождаются в запечатанных пакетах с вложенными внутрь оных переводами на голландском языке, то по содержанию письма в Верховный Совет, яко главного, Министерство Иностранных Дел долгом считает изъяснить следующее. 長崎奉行および老中宛書簡はオランダ語訳を同封して封印した行嚢にて閣下宛に送付されているが、より重要な老中宛書簡の内容につき、外務省は以下の通り説明しておくべきものと考える。

В сем письме, с коего у сего же прилагается точная копия как и с письма к Губернатору, кроме предложения японцам о вступлении с нами в торговые сношения, - о дозволении нашим купеческим судам (а также, по надобности, и военным) приставать в те порты Японии, которые будут для сего назначены, мы предъявляем также требование об установлении границ между Российскими и Японскими владениями. この書簡は、長崎奉行宛ての書簡と同様、その写しを別添してあるが、そこにおいては、我々との通商関係開設に関する日本側への提案、および追って指定する我々の商船（必要があれば軍艦も）に対する日本の港への寄港許可に関する提案の他、露日領土間の国境画定についての要求も提起している。Мысль теперь же приступить к пограничному вопросу показалась нам весьма основательною: через это можно, так сказать, заставить Японцев по необходимости войти с нами в переговоры.国境問題に直ちに取り掛かるとの考えは、根拠のあるものと思われるが、このことを通じ、いわば日本人が我々と交渉に入ることを余儀なくされるからである。От прочего они могли бы, следуя своим обычным правилам, тотчас же уклониться и дать ответ отрицательный, но предъявление нашего желания о разъяснении границ есть такого рода требование, от коего им трудно отказаться.他の場合であれば、彼らは自らの慣習により直ちにこれを回避し、否定的な回答を出すであろうが、国境を明確にしたいとの我々の要望は、彼らにとり拒絶し難いものである。Самим этим вопросом мы можем побудить Японское Правительство к большей уступчивости. 正にこの問題を用いることで、我々は幕府から大きな譲歩を引き出すことが出来る。

По сему предмету о границах наше желание быть по возможности снисходительными (не проронивая однако же наших интересов), имея в виду, что достижение другой цели, - выгод торговых, - для нас имеет существенную важность. この国境問題に関する我々の要望は、通商上の利益というもう一つの目的の達成が我々にとって本質的な重要性を持っているということを考慮すれば、（我々の利益を損なわない範囲で）可能な限り寛大なものであるべきである。Из островов Курильских южнейший, России принадлежащий, есть остров Уруп, которым мы и могли бы ограничиться, назначив его последним пунктом Российских владений, к югу, - так, чтобы с нашей стороны южная оконечность сего острова была (как и ныне она в сущности есть) границею с Японией, а чтобы с Японской стороны границею считалась северная оконечность острова Итурупа.クリル諸島のうち、ロシアに属する最南端はウルップ島であり、同島がロシア領の南方における終点と述べることで満足してよく、これにより（今日既に実際そうであるように）我が方は同島の南端が日本との国境となり、日本側は択捉島の北端が国境となる。Если бы, паче чаяния, Японское Правительство стало предъявлять свои права

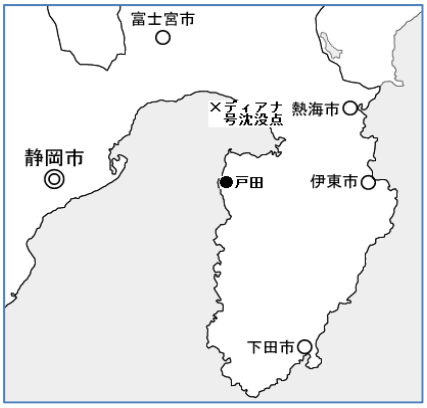
[1] 直訳は「長崎島知事」であるが、事実に即して「長崎奉行」と訳す。
[2] 直訳は「日本最高会議」であるが、事実に即して「老中」と訳す。

на сей остров, то Вы можете объяснить им, что о. Уруп на всех наших картах показывается принадлежащим России и что лучшим доказательством сей принадлежности есть то, что Российско-Американская Компания, имеющая в своём управлении Российская владения в Америке и в разных там морях, не только распоряжается Урупом наравне с прочими Курильскими нашими островами, но даже имеет там поселение, и вообще сей остров считается границею наших владений в Курильских островах.幕府が予想に反してウルップ島に対し自らの権利を主張する場合には、先方に対し、この島が我々のすべての地図中でロシア領と記載されていること、また、アメリカおよびその種々の水域におけるロシア領を管轄する露米会社が、他の我々のクリル諸島と同様ウルップ島を支配下に置き、更には住民すら有していることは、その帰属についての最良の証拠をなすものであり、一般にこの島はクリル諸島における我々の領土の境とみなされている旨を説明し得よう。

АВПРИ[3], ГА[4], 1-9, оп. 8, д. № 17, ч. 1,ЛЛ. 214-216 об. 218-218 об.

7 月 8 日	米国ペリー艦隊（旗艦サスケハナ号以下 4 隻）、江戸湾・浦賀に入港。
8 月 22 日	プチャーチン長崎入港。宰相ネッセリローデの書簡の受け取りを要請。
9 月 21 日	日本側、ネッセリローデ書簡を受け取る。
10 月 4 日	トルコ、ロシアに宣戦布告（クリミア戦争勃発）。
11 月 1 日	ロシア、トルコに宣戦布告。
11 月 8 日	筒井肥前守政憲、川路左衛門尉聖謨（としあきら）（1801 年 6 月 6 日〜1868 年 4 月 7 日）、露西亜応接掛に任命され、長崎へ出立。
11 月 18 日	プチャーチン、いったん長崎を出港。
1854 年 1 月 3 日	プチャーチン、長崎に再入港。
1 月 18 日	プチャーチンと日本側全権・筒井肥前守政憲、副全権・川路左衛門尉聖謨との交渉開始。
2 月 5 日	第 1 次交渉終了し、プチャーチン、長崎出港。
2 月 21 日	クリミア戦争でロシア、英仏に宣戦布告。
3 月 28 日	英仏、ロシアに宣戦布告。
3 月 31 日	日米和親条約締結、日本開国へ。
10 月 21 日	プチャーチン、ディアナ Диáна 号で、箱館入港。
11 月 8 日	プチャーチン、大坂湾に入る。幕府、下田回航を要請下田入港。
12 月 4 日	プチャーチン、下田入港。
12 月 22 日	日露、第 2 次交渉開始（下田玉泉寺）。
12 月 23 日	安政の東海大地震[5]（推定マグニチュード 8.4）起こる。この地震により、13 メートルの津波が下田港を襲い、ディアナ号損壊。下田はほぼ全滅（総戸数 856 戸のうち 813 戸流出、25 戸半壊）。
1855 年 1 月 19 日	ディアナ号を西伊豆の戸田（へだ）で修理することになり、戸田沖まで曳航するも暴風雨で海が荒れて漂流、宮島村（現富士市三四軒屋）沖で沈没。宮島村村民も安政の東海大地震の被害を受けていたが、乗組員を救助。
1 月 24 日	幕府、戸田村（戸数約 600 戸、人口約 3000 人）でのロシア艦建造を許可。同日、ロシア使節団約 500 人、戸田村に到着。プチャーチン提督、幕僚、士官用宿舎は宝泉寺、下士官用宿舎は本善寺と決定。日本最初の西洋式帆船の建造が戸田の船大工の手により始まる。
1 月 31 日	交渉再開（下田）。
2 月 7 日	日魯通好條約（日露和親条約・下田条約）調印。
5 月 8 日	プチャーチン、ヘダ号で出港。
1856 年 12 月 7 日	日露和親条約、批准書交換。

川路聖謨



ディアナ号沈没地点と下田・戸田

ヘダ号の模型

[3] Архив внешней политики Российской Империи（ロシア帝国外交文書）の略語。

[4] Государственный архив（国立公文書館）の略語

[5] この地震の起こった日は旧暦では嘉永 7 年 11 月 4 日であり、安政元年は旧暦 11 月 27 日から始まるが、一般にこの地震を「安政の東海大地震」と呼んでいる（なお、翌 1855 年 11 月 11 日・旧暦 10 月 2 日の「安政の大地震」とは別だが、混同している文書が多い）。

5.2. 宣教師ニコライ[6]の活動[7]

5.2.1. 宣教師ニコライの日記の発見

宣教師ニコライ（本名イヴァーン・ドミートリエヴィチ・カサートキン Ива́н Дми́триевич Каса́ткин, 1836 年 8 月 13 日〜1912 年 2 月 16 日）は、幕末から明治期にかけての日露文化交流の最大の功労者であるが、文献資料がないため、いつしか歴史に埋もれかけていた。

1912 年（明治 45 年）2 月 16 日のニコライ大主教の死後、ニコライ大主教の書き残した日記その他の文献資料は関東大震災（1923 年 9 月 1 日）で全て焼失したと信じられていたため、神田ニコライ堂（日本ハリストス正教会復活大聖堂）の創建者であるニコライ大主教は、名は知られながら知られざる人物であった。

1979 年、中村健之介･東大教授、ニコライ大主教の日記[8]がレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）の古文書館に保管されていることを確認。

5.2.2. 函館のロシア領事館の設置と宣教師ニコライの来日

(1)宣教師ニコライの生い立ち

1836 年 8 月 13 日（露暦 1 日）、イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン、スモレンスク県ベーリ郡ベリョーザ村（Березо́вский пого́ст, Бе́льский уезд, Смо́ленская губе́рния）の教会の輔祭の子として生まれる。郡教会付属初等学校、郡神学校を経て、1860 年ペテルブルグ神学大学を卒業し、「ゴロヴニンの手記（『日本幽囚記』）によって日本民族への愛情がわいた」ため、妻帯司祭ではなく修道司祭として来日することを決意し、箱館ロシア領事館付司祭に任命される。

(2)宣教師ニコライ来日までの経緯

1855 年 2 月 7 日	日露通好条約（下田条約）調印。
1858 年 10 月 24 日	プチャーチン使節の中国語通訳であったヨシフ・アントーノヴィチ・ゴシケーヴィチ（Ио́сиф Анто́нович Гошке́вич, 1814〜1875 年 10 月 5 日）、箱館のロシア領事館の初代領事として着任。同時にプチャーチン使節のディアナ号の艦付き司祭であったワシーリー･マーホフ（Васи́лий Ма́хов）が領事館付き長司祭（протоиере́й）として着任。しかし、マーホフは着任時すでに 60 歳の高齢であったため、ゴシケーヴィチ、宗務院[9]（Сино́д）に後任の派遣を要請（日本において将来、布教が許可される可能性を示唆し、有能な司祭を求めた）。
1860 年 7 月 4 日	（露歴 6 月 22 日）24 歳のカサートキン、応募者 4 名の中から選ばれ、剪髪式を受けて修道士となり名をニコライと改める。
12 日	（露歴 6 月 30 日）ニコライ、ペトル・パウェル祭の日にサンクトペテルブルグ神学大学の十二聖使徒聖堂で司祭に叙聖。
8 月 13 日	（露歴 8 月 1 日）親兄弟たちと別れ日本に向けてシベリア横断の旅に出発（シベリアを馬・船で横断）。この別れのときに父ドミートリーからもらったキリストの聖像は生涯ニコライの自室にあったと言われる。
9 月下旬	ニコラエフスク（Никола́евск）[10]に到着し、当地で越冬中のアラスカで宣教の経験を持つ、のちのモスクワ府主教イノケンティ（Митрополи́т Иннокéнтий Московский＝Ива́н Евсеéвич Попо́в-Вениами́нов, 1797 年 8 月 26 日〜1879 年 3 月 31 日）と出会い、聖書と祈祷書を宣教地の言語に翻訳し正教の土着化を計ることを教えられる。
1861 年 7 月 14 日	ロシア軍艦アムール号で箱館に到着、領事館に着任。

5.2.3. 宣教師ニコライの活動

(1)宣教師ニコライ、日本を学ぶ

?〜1864 年	西蝦夷警備のため派遣された秋田の久保田藩兵とともに箱館に来ていた軍医・儒学者木村謙斎について日本語・日本史（『古事記』、『日本外史』）などを学ぶ。
1864 年 4 月	航海術を学ぶため箱館に来た新島襄（当時 22 歳、のちの同志社創設者）について日本語・日本史などについて学ぶ。
1868 年	新島の脱国・渡米を助けた攘夷派宮司の沢辺琢磨（さわべ・たくま、洗礼名パウェル、1834 年 2 月 13 日〜1913 年 6 月 25 日）を含む 3 名にキリシタン禁制下、洗礼を授ける。
1869 年初め	日本宣教団設立の請願のため一時帰国。プチャーチン（下田条約締結後、海軍軍人から政治家に転進し、1861 年国民教育相、その後国家評議会議員に勅任）、これを支援。

---

[6] 最終的には大主教に叙聖されたので、「ニコライ（日本）大主教 Архиепи́скоп Никола́й Япо́нский」とも言う。日本ハリストス正教会では「亜使徒聖ニコライ」あるいは「聖ニコライ」と呼んでいる（http://www.orthodoxjapan.jp/ [2011 年 5 月 9 日アクセス]）。

[7] 中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』（岩波書店、1996 年）および注 3 の年表を参考にしている。

[8] 中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記（全 9 巻）』教文館、2007 年。本学、キリシタン文庫に所蔵。

[9] 正確には最高宗務院（Святе́йший Прави́тельствующий Сино́д）。ピョートル 1 世により創設されたロシア正教会を監督するための国家機関。

[10] 現ニコラエフスク・ナ・アムーレ（Никола́евск-на-Аму́ре）。

6 月 20～27 日　函館[11]五稜郭戦争。
1870 年　日本宣教団（日本伝道会社）設立。団長に任命され、修道司祭から掌院に昇叙される。『宣教師ニコライの全日記』は、この年ペテルブルク滞在中の日記から始まる。
1871 年 3 月初め　函館に帰任。露和辞典を編纂刊行。

(2)宣教師ニコライの布教活動

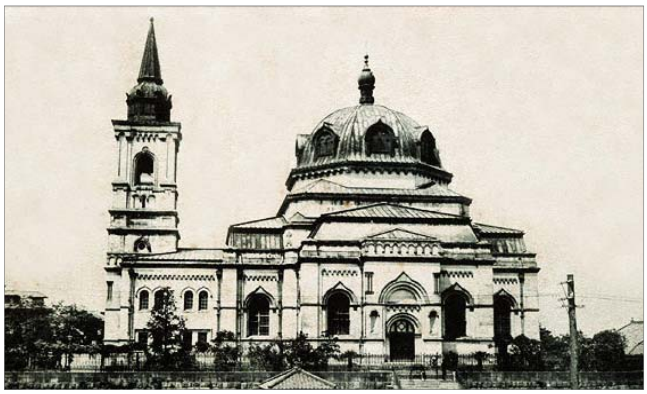
1872 年 1 月　東京神田駿河台（現在のニコライ堂の所在地）に宣教団本部（本会）を設立。布教活動開始。
明治期の日本ハリストス正教会にはロシア人宣教師は最も多い時期でも 4 ないし 5 人（1877 年、在日外国人宣教師は、カトリック 45 名、プロテスタント各派 99 名）。→正教会は日本人伝教者による伝道が中心。
1873 年　明治政府、「切支丹禁制」の高札を撤去。
1875 年　パウェル沢辺、函館で司祭に叙聖。
1876 年　東京本会に女学校、正教神学校を創立。
1877 年 11 月　機関紙『教会報知』第 1 号発行。
1879 年春　東京復活大聖堂建設資金募金のため 2 回目の一時帰国。
1880 年　ペテルブルクでプチャーチン一家と親交を深める。掌院から主教に昇叙。ドストエフスキーと会う。11 月、日本に帰国。12 月、山下りん、イコン制作修得のためペテルブルクへ留学（1883 年帰国）。『教会報知』に代わり、『正教新報』発刊。
1881 年　群馬県・東北地方を巡回。
1882 年　九州、中国、四国地方を巡回。パウェル中井木菟麿（なかい・つぐまろ）とともに奉神礼用諸書の翻訳を開始。大阪に伝教学校を開設。
1884 年　プチャーチンの娘オリガ、日本宣教団支援のため来日（1987 年帰国）。東京復活大聖堂着工。
1891 年 3 月 20 日　東京復活大聖堂竣工。
1891 年 5 月　皇太子ニコライ来日（4 月 27 日～5 月 19 日）。大津事件で負傷した皇太子を京都の常盤ホテルに見舞う（5 月）。北海道、九州の諸教会を巡回。
1892 年　中国、四国地方、東海道方面、上総地域、群馬県、八王子などを巡回。女性文芸雑誌『裏錦』発刊。
1893 年　長野県、北海道、一関、盛岡、福島などを巡回。
1894 年　中井とともに新約聖書の翻訳にとりかかる。
1895 年　この年、全国に 220 の教会、信徒数は約 22,000 名（男女ほぼ同数）。
1898 年　色丹島を含む北海道各地の教会の巡回。教役者の互助組織「遺族慰問会」が誕生。
1900 年 10 月　信徒家庭向け月刊誌『正教要話』発刊。
1901 年　正教会訳『我主イイスス　ハリストスノ新約』刊行。
1904 年 2 月 8 日　日本陸軍、朝鮮の仁川に上陸（日露戦争開戦）。
9 日　日本海軍、旅順港のロシア軍艦 2 隻を撃沈。
10 日　日本、ロシアに宣戦布告。
ニコライの主教教書「神に祈りてなんじらの皇軍に勝利を賜わんことを求めよ」。
ロシア駐日公使ローゼン、公使館全員の退去を決定。ニコライにも帰国を促すが、ニコライはとどまることを決意。
ロシア正教会信徒をロシアのスパイ（露探）呼ばわりする風潮蔓延。
ニコライ、ロシアの敗北に恥辱を感ずる（愛国心の高揚）。
1905 年　約 79,000 名のロシア兵捕虜の「信仰慰安」のため全力を尽くす。日露戦争終結（9 月 5 日ポーツマス条約調印）。
1906 年 4 月 6 日　ロシア宗務院より大主教に昇叙される。
1911 年　日本宣教 50 周年記念祝賀会。この年、信徒 31,984 名、教会 265、聖職者 41 名、聖歌隊指揮者 15 名、伝教者 121 名。
1912 年 2 月　心臓病が悪化、聖路加病院に入院。その後、主教団に戻る。
16 日 19:00　永眠（75 歳）。22 日、東京復活大聖堂で葬儀。谷中墓地に葬られる。「遺業は、大聖堂 1、聖堂 8、会堂 175、教会 276、主教 1、司祭 34、補祭 8、伝教者 115、信徒総数 34,111 であった」。
22 日　東京復活大聖堂で葬儀。谷中墓地に葬られる。「遺業は、大聖堂 1、聖堂 8、会堂 175、教会 276、主教 1、司祭 34、補祭 8、伝教者 115、信徒総数 34,111 であった」。
1917 年　日本正教会、ロシア正教会との関係断絶。
第 2 次世界大戦後　日本正教会、在米ロシア正教会と関係を構築。
1970 年 4 月 10 日　日本正教会代表団、モスクワにおいて総主教アレクセイより、日本正教会の聖自治教会（アウトノモス）の祝福を得る。同日、ニコライ大主教、ロシア正教会において「亜使徒」として聖人に列せられる。

5.2.4. 宣教師ニコライの伝道の特徴

日本語を完全に習得している。
寒村僻地にまで足を運んでいる。

[11] 函館市ホームページによると、箱館から函館へと名称が変更されたのは 1869（明治 2）年のことであるという（http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/yowa/yowa_contents/yowa_001.htm [2011 年 5 月 9 日アクセス]）。

聖歌隊の組織を重視し、聖歌隊とともに各地を巡回している。



創建当時（左上・右上）および現在（右下）の東京復活大聖堂（ニコライ堂）

5.3. 皇太子ニコライ来日

5.3.1. ニコライ 2 世の日記

ロシア帝国最後の皇帝ニコライ 2 世 Никола́й II, Никола́й Алекса́ндрович Рома́нов（1868 年 5 月 18 日～1918 年 7 月 17 日）は、1882 年（14 歳）から銃殺される 3 日前の 1918 年 6 月 30 日（西暦 7 月 13 日）まで 51 冊の日記を書き残している。

ニコライ 2 世の日記はモスクワのロシア連邦国立アルヒーフ（史料館）に保存されており、1983 年 9 月（当時はソ連中央国立十月革命史料館）、外国人としてはじめて日本の保田孝一岡山大教授が閲覧した。

保田孝一は『最後のロシア皇帝　ニコライ二世の日記』[12]を書き、ニコライ 2 世が「大津で津田三蔵（つださんぞう）に斬りつけられたことを根に持ち、日本人を『猿』と軽蔑し、日露戦争を仕掛け、日本を征服しようとした」人物であったとの俗説を覆すニコライ 2 世像を描き出した。

5.3.2. 皇太子ニコライ（当時 22 歳）の訪日（1890［明治 23］年 11 月 4 日～1891 年 8 月 16 日）

(1)全日程

軍艦「アゾフ記念 Па́мять Азо́ва」号で、オーストリアのアドリア海に面するトリエステ港［現イタリア］を出港。長崎[13]到着時のロシア軍艦は 7 隻。

エジプト（ナイル川をアスワンまで遡行）、スエズ運河、インド、セイロン（現スリランカ）、シンガポール、ジャワ島、サイゴン（現ホーチミン）、ショロン（ホーチミン郊外）、バンコク、香港、広州［コワンチョウ］、揚子江を漢口［ハンコウ］（現武

[12] 保田孝一『最後のロシア皇帝　ニコライ二世の日記』講談社学術文庫、2009 年（朝日選書 1990 年版の再版）。

[13] 1855 年 2 月 7 日の日魯通好條約（日露和親条約・下田條約）締結後、長崎はロシア東洋艦隊の越冬地となっていたため、ロシア海軍にはなじみの土地であり、長崎に滞在する海軍士兵への慰問も兼ねて、皇太子ニコライの日本での最初の寄港地として選ばれたと考えられる。

漢［ウーハン］）まで遡行、長崎（1891 年 4 月 27 日～5 月 5 日）、鹿児島、神戸、京都、大津（5 月 11 日）。

(2)日本旅行の詳細

4 月 25 日　「私の心はずっと以前から長崎にある。予定より 2 日前に長崎に到着できるのがうれしい。そこでの停泊はすばらしいという話だ。」

4 月 26 日　「日本旅行の準備のために『お菊さん』[14]を読み始めた。」

4 月 28 日　「12 時に有栖川宮威仁親王[15]が艦にやってきた。彼は 1889 年にガッチナ宮（サンクト･ペテルブルク郊外の離宮）を訪れたことがある。好感の持てる人物だ。」

「長崎市の家屋と街路はすばらしく気持ちのよい印象を与えてくれる。いたるところ掃除が行き届き、こざっぱりしていて、彼らの家の中に入るのが楽しい。日本人は男も女も親切で愛想がよく、中国人と正反対だ。とくに驚いたのはロシア語を話す人が多いことだった」。

この日ニコライは 7 軒の商店を訪れた。江崎鼈甲店[16]にはそのときにニコライが名刺代わりに与えた「善人江崎栄造殿　皇太子ニコライ」と書かれた肖像写真が現在でも残っている。

「昼食の後に右腕に竜の入れ墨をする決意をした・・・竜は見事に彫られており、腕はまったく痛まなかった。」

5 月 4 日　「稲佐村のゴリツィン（長崎駐留将校）宅へ直行した。そこで何人かの将校の奥さん（日本人妻）と知り合いになった。・・・彼女たちの間に座る。彼女らはみなロシア語をしゃべり非常に好感が持てる。」

その後（日本側その他の史料によると）、ロシア仕官寄宿所、福田半造方に行き、そこで芸舞妓 5 名を招き、5 日午前 4 時帰艦。

5 月 6 日　鹿児島の島津忠義邸を訪問。忠義の贈呈した薩摩焼の壺がエルミタージュに残されている。島津忠義･忠重親子はその後も日露交流を推進。

5 月 9 日　神戸入港、午後 6 時過ぎ、列車で京都着。京都市盲唖院を訪問し、京都市に 2,000 円を寄付[17]。

京都では常盤ホテル（現在の京都ホテル）に宿泊した。ニコライには洋室があてがわれたが、それを断り、日本間に泊まった。その建物は現在の安養寺に移築されている。市内では、西陣の川島織物を見学したことがわかっている。このとき、二代目川島甚兵衛が製作した綴織（つづれおり）を背景に写真を撮影している（写真は現存）。夜は、八坂神社近くの祇園のお茶屋「中村家（現在の中村楼)」を密かに訪ねており、その部屋も現存している。

5 月 11 日　琵琶湖遊覧の帰途、大津町（現、大津市）で警衛中の滋賀県巡査・津田三蔵に斬りつけられ、頭部に軽症を負ったが、同行のギリシア王子ゲオルギオス[18]と二人の車夫に助けられた。

ニコライ一行を一目見ようと見物客でごった返す市街地の旧東海道を左折したところで、事件は起きた。犯人を取り押さえたのは、車夫の北賀市太郎、向畑治三郎の二人で、のちに彼らにはロシアから勲章が与えられた。琵琶湖文化館にはサーベルと血染めのハンカチが残っている。ボリシェヴィキ政権成立後の 1918 年 7 月 17 日に射殺されたニコライ 2 世とその家族の遺体が第 2 次世界大戦後、処刑地のエカチェリンブルクのイパチェフ邸の近くの森で発見され、1994 年に DNA 鑑定により間違いなく本人のものとされたが、このときの DNA 鑑定の材料に使用されたのがこの琵琶湖文化館に所蔵されるハンカチに残されたニコライの血痕であった。

---

[14] ピエル・ロティ（Pierre Loti）、本名ルイ・マリー＝ジュリアン・ヴィオー（Louis Marie - Julien Viaud, 1850 年 1 月 14 日～1923 年 6 月 10 日）の小説。野上豊一郎翻訳が岩波文庫から、関根秀雄訳が河出文庫から、根津憲三訳が白水社から、それぞれ出版されている（いずれも著者名はピエール・ロチとなっている)。ピエル・ロティは現役フランス海軍士官にして作家であった。ロティは、1885 年と 1900 年に長崎に滞在しており、1 回目の滞在経験をもとに、日記形式の小説『お菊さん』を書いている。現代日本人の立場からこの小説を客観的に評価するのは難しい。「かれは皮肉たっぷりに、日本人のすることなすことに驚き呆れて見せて、さんざん日本と日本人の悪口を言っている。だが、じっさいに目に映ったこと、耳に聞こえたこと、舌で味わったことを、一切の感傷を排して率直に写生的に書き記したことも事実で、そこからかえって、お菊さんへの情愛、長崎への愛着が色濃くにじみ出ているように感じられる。しかも、同じ作品の中に、かれがお菊さんの母親の家を見て、その当時フランスの上流階級で流行っていた過度に華美な装飾としての Japonisme（日本趣味）は偽物だと断ずる箇所があることから、日本的な簡素の美というものがたしかにあることが、かれにはわかっていたことがうかがわれる」といった評価がある一方で、「あまりにも日本や日本人をこきおろしており、差別用語大満載の書物」との評価もある。また、米国人ジョン・ルーサー・ロングが小説として書き、米国の劇作家デーヴィッド・ベラスコが戯曲とし、これらに基づいてプッチーニが作曲したオペラ『蝶々夫人』もそうだが、「現地妻」という、現在の立場からするとジェンダー論的に大いに問題となる存在を肯定的に描いていることなどもこれらの作品が厳しく評価される理由かも知れない。しかし、少なくとも、皇太子ニコライはこれを読んで、ますます長崎と日本の訪問に胸をふくらませていたことが、その日記からは窺われる。

[15] 有栖川宮威仁（ありすがわたけひと）親王（1862 年 2 月 11 日～1913 年 7 月 5 日)。皇族、海軍軍人。1881 年 1 月 9 日から 1883 年 6 月 6 日まで英国海軍大学留学および仏米訪問、1989 年 2 月から 1890 年 4 月まで米、仏、英、露、スペイン、スイス、北欧各国歴訪等の国際経験を買われて、皇太子ニコライの接待役を命じられていた。なお、いったんは皇女和宮と婚約したものの、公武合体論により和宮は 14 代将軍徳川家茂に降嫁することになったため、和宮との婚約を破棄された有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）親王は異母兄。

[16] 1709 年創業の鼈甲専門店の老舗。サンクト・ペテルブルクの中央海軍博物館に、皇太子ニコライが 5 代目江崎栄造から贈られた鼈甲（べっこう）製の「アゾフ記念」号の模型が残されている。

[17] 『京都府誌　上』京都府、1915 年、708 頁。京都では常盤ホテル（現在の京都ホテル）に宿泊した。ニコライには洋室があてがわれたが、それを断り、日本間に泊まった。その建物は現在の安養寺に移築されている。市内では、西陣の川島織物を見学したことがわかっている。このとき、二代目川島甚兵衛が製作した綴織（つづれおり）を背景に写真を撮影している（写真は現存)。夜は、八坂神社近くの祇園のお茶屋「中村家（現在の中村楼)」を密かに訪ねており、その部屋も現存している。

[18] ギリシア王子ゲオルギオス（Πρίγκιπας Γεώργιος της Ελλάδας　1869 年 6 月 24 日～1957 年 11 月 25 日)。父親はデンマーク王子からギリシア国王となったゲオルギオス 1 世（Christian Wilhelm Ferdinand Adolf Georg, Γεώργιος Α΄ της Ελλάδας, 1845 年 12 月 24 日～1913 年 3 月 18 日)、母親はロシア皇室出身のオリガ･コンスタンチノヴナ（Óльга Константи́новна, 1851 年 9 月 3 日～1926 年 6 月 18 日）で、ロシア皇帝アレクサンドル 2 世（Алекса́ндр II, Алекса́ндр Никола́евич Рома́нов, 1818 年 4 月 29 日～1881 年 3 月 13 日、ニコライ 2 世の祖父）の弟コンスタンチン大公（Константи́н Никола́евич, 1827 年 9 月 9 日～1892 年 1 月 13 日）の娘である。また父親のゲオルギオス 1 世の妹マリアは皇太子ニコライの母親である。したがって皇太子ニコライとギリシア王子ゲオルギオスは従兄弟（いとこ）同士である。

「有栖川宮殿下その他日本人の茫然とした顔を見るのはつらかった。」

5月13日　「日本のものはすべて4月29日（大津事件のあった日の露暦）以前と同じように私の気に入っており、日本人の一人である狂信者がいやな事件を起こしたからといって、善良な日本人に対して少しも腹を立てていない。」

明治天皇が東京から急遽京都の宿舎に見舞いに駆けつける。

大国ロシアの皇族を日本の警察官が襲うという前代未聞のこの事件で、国内は騒然となったが、天皇の見舞いを皮切りに、日本全国からさまざまな見舞い品がニコライのもとに届けられた。京都では、川島織物の川島甚兵衛が謝罪の気持ちを込めて、双頭の鷲（ロシア皇室の紋章）と菊の紋章（日本の皇室の紋章）が描かれた縁取りのある、「犬追物」の図柄の、畳6畳敷きほどの大きさの綴織壁掛を寄贈している。これはエルミタージュ美術館に現存しており、職人が7人がかりで1年半の歳月をかけて制作されたと言われている。また川島は等身大の舞妓人形も贈ったとされる。いずれにせよ、綴織壁掛は美術品として見ても見事な作品で、これをきっかけに、川島織物はロシア皇室御用達となっている。また寺院の灯篭が1対贈られたが、これは徳川ゆかりの東京の増上寺清揚院殿のものと言われている。他方、日本政府は、この事件によりロシアとの関係が悪化することを恐れ、内閣・元老らを中心に、犯人に対して旧刑法第116条（大逆罪）を適用する動きがあったが、大審院院長・児島惟謙（こじま・これちか）が通常謀殺未遂を適用するよう主張し、その結果、1891年5月29日、大審院は無期徒刑（懲役）の判決を下した。この判決後、青木外相は辞職し、後任には初代ロシア公使だった榎本武揚が任命された。大津事件についての同時代の記録は、尾佐竹猛『大津事件』岩波文庫、1991年に詳しい。

5月16日　日本旅行（上京）を中止し、ヴラジヴォストークへ直行せよとの本国からの命令が来る。

5月19日　明治天皇、アゾフ号に行幸。この日までに多くの市民からの見舞いが届く。ニコライ、離日。

ギリシア王子ゲオルギオス（左）と皇太子ニコライ

人力車による観光

5.3.3. ニコライ2世と日露戦争

皇太子ニコライの極東行幸は、ヴラジヴォストークでのシベリア鉄道起工式に皇帝の名代として参加することであった。

ニコライが大津事件に遭ったことで、日本嫌いになり、のちの日露開戦の遠因となったという俗説があるが[19]、すでに見たように、事件当時のニコライの言動や日記等にも日本嫌いになったことを示すものは見当たらない。

また、本人の日記の記述ばかりでなく、大津事件の後もニコライの日本に対する感情が変化しなかったことを伝える資料は少

[19] こうした俗説を広めるのに大いに貢献した例として、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』（文藝春秋、1969～72年）がある。もちろん、小説はフィクションだからと免罪することもできる。しかし、啓蒙書・学術書となると、そうはいかない。日本でも数多くの研究書が翻訳出版されているフランスのロシア史家エレーヌ・カレール=ダンコースは、『甦るニコライ二世：中断されたロシア近代化への道』（藤原書店、2001年、原著は1996年出版）の中で、大津事件について次のように書いている。「大津で一人の日本人青年が皇太子に襲い掛かり、サーベルの一撃で頭がい骨に裂傷を与えた。傷は比較的に深く、傷痕と頭痛を残すことになるが、脳にまでは達していなかった。この襲撃事件の真相は決して分からず、矛盾する説明がなされた。神域での皇太子の態度が尊敬の念を欠いていたと判断して激昂した日本人の犯行説？ 若い日本婦人にしつこい視線を送ったことへの嫉妬心からの犯行説？ ともあれ、この思慮を欠いた行為の説明がどうであろうとたいした問題ではない。その代わり、事件が及ぼした結果は検討に値する。1881年のテロ事件以来、ニコライは、爆弾で手足を吹き飛ばされて瀕死の状態だった祖父の思い出と、テロ襲撃への恐怖心にさいなまれていた。自ら体験したばかりの襲撃事件は、辺りに潜む危険と、それから身を守るために必要な権威とについての妄想をいっそう深めさせた。その上、ニコライはアジアにも日本にも好奇心を抱いたことは決してなかった。彼の極東旅行は、読書によっても、いかなる考察によっても準備されなかった。彼にとって、日本は奇妙で、未知で、敵意を含んだ世界だった。大津事件は、彼が理解しようと努力しなかった国に対する嫌悪感を強めさせ、日本人は野蛮人であると確信を深めさせることになる。以後、彼は軽蔑を込めて日本人を『猿』扱いすることになる。この軽蔑心は、日露戦争当時に優越感と無分別さとなって彼の行動に現れることになる。（中略）若きプリンスがアジア的なもの全てに敵意を抱き、『猿ども』が住んでいると考えているこの宇宙で中国人と日本人の判別も不可能だったことを考えるならば、彼が自分に課されている義務を果たすやいなや、文明の天国であるペテルブルクに向け出発を急いだことは想像に難くない」（74-75頁）。数多くの翻訳が出版されている世界的に著名な（？）歴史家だからと言って、書いていることすべてが正しいわけではないという好例がここにある。カレール=ダンコースは、この著作の中で、ニコライの日記について言及してはいるが、この引用部分を見ただけでも、おそらくニコライの日記を直接に読んでもいないし、ニコライの日記に関するすぐれた研究書にもあたっていないと想像できる。いずれにせよ、「ニコライ二世」の名を冠したこの著作が、少なくとも来日時の皇太子ニコライの実像にはまったく迫れていないことだけは確かである。さらに言えば、大津事件が原因でニコライ2世が日本嫌いとなり、日本人を「猿」呼ばわりしているという俗説が、フランスの学者によっても信じられているということのほうがむしろ興味深い。

なくない。例えば、1891 年 8 月にペテルブルク郊外に帰着したニコライを出迎えた日本の西徳二郎駐露公使は、「我邦ニ対シテ悪シキ感シハ毛頭保タレサル趣」と報告している（西公使より榎本外務大臣宛機密報告第 15 号「露国皇太子待迎ノ件」）。また、翌 1892 年 1 月 20 日、西公使がアニチコフ宮殿にニコライを訪問し、明治天皇の親書、日本の古い武器一式などを贈呈した際、ニコライは、「おほ（お）きにありがた（と）う」と日本語で感謝の意を伝え、「予ハ貴国ニ対シテ誠ニ好キ感情ヲ保テリ」と繰り返し述べたことが報告されている（西公使より榎本外務大臣宛機密報告第 1 号、1892 年 1 月 21 日）。以上は、外務省外交資料館特別展示「日露関係のあゆみ：1855-1916」の解説に基づく（http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j_russia_2005/2_2.html）。

以上のことから、少なくとも、当時の日本政府は、ニコライ 2 世（1894 年に皇帝即位）が反日的ではなく、日本に好感を持っているということを認識していたと考えてよいであろう。

開戦直前の日記には日露関係についての具体的記述が少なく切迫感がない（政治から切り離されていた？）。

1904 年 2 月 9 日開戦時の日記は「日本軍の厚顔な行為」と記しており、津田を狂人と書いた以外のもう一つの日本人に対する罵りの言葉であった。

5.3.4. ロシアと長崎[20]

皇太子ニコライが 1891 年 5 月に立ち寄った長崎の稲佐地区が、ロシア人から「ロシア村 Ру́сская дере́вня」と呼ばれるまでになったのは、ニコライ訪日の 30 年も前の万延元（1860）年、長崎港を「極東」における医療的良港として見出したリハチョーフ И.Ф. Лихачёв 艦隊が臨時海軍病院およびロシア水兵専用の遊廓「魯西亜マタロス休息所」を置いて以降のことである。ロシア艦隊は、その後も常に長崎港における医療環境の向上に関心を寄せ海軍病院の拡充に努めバーニャ（ロシア式サウナ風呂）を設置した他、修繕所（バッテラや帆布用）等の小規模施設を置いて艦隊の便宜を図った。そして、周辺には、ロシア海軍士官の住宅、ロシア海軍軍人向け商業施設や料亭（諸岡まつの経営する Во́лга が有名）、「ロシア将校集会所」や上述「魯西亜マタロス休憩所」等の遊興施設などがあって、ロシア海軍関係者で賑わっていた。

ロシア海軍士官は、その住居に「現地妻」を置いている者もおり、女中、下男、従者など日本人雇用者もいたため、皇太子ニコライの訪日当時、すでにロシア語を解する多くの日本人が稲佐にいたと考えられる。温暖で風光明媚、文化的水準の高い長崎、とりわけその稲佐地区は、極東に勤務するロシア・エリートたちにはよく知られた場所で、皇太子ニコライ訪日後の 1890 年代半ばには、ロシア人向けホテル Весна́（「春」の意。経営者は道永えい＝稲佐お栄、のち諸岡まつが経営）さえ開設されている。

こうした、長崎稲佐地区の繁栄は、イギリスをはじめとする各国との間に結ばれた通商航海条約の発効により、1899 年、「不平等」条約が一部改正され、領事裁判権が撤廃されて居留地が廃止されるまで続いた。

日露戦争後、捕虜となったロシア海軍士官・水兵 9,000 人以上が稲佐地区に滞在していたことも知られている。稲佐にある悟真寺は現在でもロシア人墓地があることで有名で、このロシア人墓地には、ゴルバチョフ・ソ連大統領が 1991 年に訪日した際に訪問している。悟真寺とロシアとの縁はプチャーチン来航時の宿泊先だったことに起因している。

[20] ロシア艦隊と長崎の関係については、とりあえず、宮崎千穂「不平等条約下における内地雑居問題の一考察－ロシア艦隊と稲佐における「居留地外雑居」問題－」『国際開発研究フォーラム』27（2004 年 8 月 http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/27/04.pdf ）および同「外国軍隊と港湾都市－明治 30 年代前半における雲仙のロシア艦隊サナトリウム建設計画を中心に－」『スラヴ研究』No. 55（2008 年 http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/39242/1/55-008.pdf ）を参照。後者には、各年のロシア艦隊入港回数など貴重な統計も示されている。